

令和3年度年報の発行に寄せて

院長 佐藤耕一郎

令和3年度岩手県立磐井病院年報発刊にあたり、ご挨拶申し上げます。今年度は2006年度に新築移転してから16年目にあたり、当院職員をはじめとします医師会や市、その他の関係者の皆さまのご協力により、コロナ過3年目も何とか院内感染を防ぎながら病院を運営できていますことに心より御礼申し上げます。

さて、今年度も新型コロナウイルス感染症の勢いはとどまることを知らず、現在オミクロン株を主体として感染が拡大し、県で設定した人数の10倍の患者が発生しているため、病院や宿泊施設では収容しきれず、ほとんどの患者さんが自宅療養となっております。

このような状況下での当院のミッションは、両磐地区の救急、小児・周産期、がん診療と新型コロナウイルスの診療です。新型コロナウイルスは指定感染症の2類であり、適切なゾーニングのもとに患者隔離が行われなければなりません、病院の構造がそれを行うことに合致しておらず、院内感染を防ぐために1病棟をすべてコロナ患者さん用の病床に充てております。そのため他の疾患を診る病床が足りず、満床警報を近隣の病院や救急隊に鳴らして病院運営を行っております。このように救急、小児・周産期、がんなどの通常診療に加えて新型コロナウイルスの診療とすさまじい負荷が県立病院全体に加わった状況で、さらに2024年4月からの医師の働き方改革にも対応するために医師の働く時間を減少させねばならず、矛盾の中で当院がとった行動は医師の数を増やすということでした。コロナ過で収益が上がらず、新たな医師の採用を見送る病院が多い中で、原資をコロナ補助金として医師の増員を行い、医療の質を上げ、働きやすい病院を作るために医師の数を増加させております。今後補助金が切れた時の対策も考えなければなりません、まず、医療の質を上げて次に経営の質を上げるという算段を組んでことを進行中です。

コロナは我々に院内感染の危険性や仕事量の増加を与えただけではなく、飲み会や各クラブ活動などのコミュニケーションの場を奪い去りました。それにより、各部署でコミュニケーション不足から種々の問題が発生しております。しかし、このような紙上からでもその人なりを知ることができるわけで、この病院年報を新たなコミュニケーションの場としてご活用いただけることをご提案申し上げます。

職員の方々がこのコロナ過でさえ、それぞれが重要な役割をになって各人の自覚のもとに磐井病院を支えている以上、当院は以前からの目標である日本一の病院を目指して邁進し続けてゆけるものと信じて疑いません。去年より今年、今年より来年と、より成果の高い積み重ねの記録が今後の年報に記されることを祈念して巻頭の言葉とさせていただきます。